

## 使徒言行録7章44節～8章1a節

『わたしの霊を受けてください』

ステファノの説教を3回に分けて聞いていますが、今日はその最後を迎えました。ステファノは民衆、長老たち、律法学者たちによって逮捕され、最高法院につれていかれ、強引に裁判を受けることになりました。その時彼を訴えた人々が罪状として挙げたのは二つでした。一つは、神殿を冒瀆しているということ。もう一つは、律法をけなしている、ということでした。神殿と律法、それはユダヤの人々が最も大事にしているものであり、生活と信仰の中心にあるものでした。その二つをステファノは冒瀆した、というのです。

大祭司がステファノに対して、「訴えのとおりか」と尋ねると、ステファノは自分の潔白を証明する、というのではなく、聖書の話をはじめたのでした。旧約のアブラハム、ヨセフ、そしてモーセについて語り始めた。ステファノは二つのことを語りました。一つは、アブラハム、モーセという神が語る言葉に聞き、神の言葉に具体的に応答し、立ち上がり、歩みだすという信仰者を神は立てられ、用いられた、ということ。神の言葉によって生きる人間がたてられていく。聖書の信仰とは何か、具体的に示されていく。

もう一つは、そのモーセが語る神の言葉に従おうとせず、彼を退け、挙句偶像の神々を造ろうとする反逆の人々がいる、ということです。この二つのことをステファノは語った。

そして今日の聖書箇所44節からステファノの説教は幕屋の話へと進んでいきます。幕屋というのは、移動式の礼拝場です。神によってエジプトを脱出したイスラエルは、十戒を与えられる。しかし、尚それから荒野を40年にわたって旅することになります。その際、最も大事なことのひとつとして、神から命じられたのが、幕屋建設、ということでした。それは旅を続けるイスラエルにどうしても必要な、移動式の礼拝場でした。神は微に入り細に入りの幕屋建設の指示を与え、移動式の礼拝場の建設を命じるのです。

イスラエルは十戒を与えられた。礼拝する場としての幕屋づくりを神から示された。この二つを中心にして、荒野の旅を続けるのです。彼らはどんなところに行っても、どんな時も、律法によって生活し、幕屋を中心とする礼拝によって生きたのです。やがてイスラエルの民がカナンに定住し、イスラエルを国家として形成する中で、王たちは幕屋ではなく、神殿建設を計画します。はじめダビデが計画したのですが実現に至らず、次のソロモン王の時に、イスラエルは神殿を建設するのです。こうしてユダヤ社会に律法と神殿というイス

ラエルの民の中心となるものが確立していくのです。今奇しくも、ステファノはその二つのことを両方とも冒瀆している、という罪で逮捕尋問されているのです。

ステファノはこの説教において、この二つの事柄の根本に立ち帰って語っています。律法のことと神殿のことと。

律法の根本にあるのは、神がモーセを通して与えた十戒です。そしてさらに言えば、人間が生きるための言葉を与えられる神の存在です。神が語られる、そこに律法の根源があります。

律法に聞くとか、守るとか、生きるということは、神の言葉を聞いて生きるかどうかというわたしたちの生きる根本の姿勢が問題になるのです。

一方神殿は、神と出会う場です。

語りかけられる神と出会う場です。そして神に自分をささげて生きる、そういうわれわれの方向転換が起こっていく場です。神さまのお話を聞いて終わり、という場所ではない。そこで具体的に、このわたしが神に向かって歩き始めるという方向転換が起こる場所です。

最初に神殿を建設したソロモンは「けれども、いと高き方は人の手で作ったようなものにはお住みになりません。」と言った。神が神殿に住むわけではない。それは、わかっている。古代の人々もわかっているのです。

また最初にモーセに幕屋建設を命じられた時、神はこう言われた。「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。」彼らのうちに住む、とは、幕屋に住むということではなく、あなたがたのうちに、つまりあなたがたと共にある、ということです。具体的には、あなた方のうちにとは、神が語りかける言葉において、あなた方のうちにある、ということです。言葉と出会い、その言葉があなた方の中で生きて働く、神はそのような仕方、あなた方のうちにいてくださるということです。

聖所、幕屋、神殿は神があなたと共におられる、ということのしるし、象徴なのです。それはわかっていた。にもかかわらず、神殿という場が、建物が、空間が特別な場所になり、聖なる場となり、神殿を神聖視していく。

これはどういうことなのか、と考えていくと、神殿で神の言葉と出会うということをやめてしまう時、わたしたちは神殿という施設に行くことそのものに意味を見出していく、ということなのかもしれません。神殿という建物に有難さを感じ、この建物に神がおられるという観念にすがっていく。わかりやすい。境内に身を置いただけで、ありがたい、といった感情に身を置いていくのです。

巨大な宗教施設、例えば天理教の本部神殿のような施設を見ると、圧倒されるものがあります。立派ですし、見事です、巨大。人はその建物の壮麗さに威圧される。まして、そこに神が住んでおられると思うなら、なおさらです。

神の言葉に出会い、神の言葉に聞く、ということをやめたら、宗教的な施設とは、ただそのような有難い場所になるのです。そしてそれは神殿を神聖視することと紙一重です。

イエス・キリストは「この神殿を壊してみよ。三日で立て直してみせる。」と言われたことがありました。これが主イエス逮捕、十字架刑の直接の原因にもなった発言です。ある意味過激な発言です。しかし主は、この人間の手で作った神殿を壊しても、ご自分の十字架と復活において、まことの礼拝の場を一新する、ということを言われたのです。どれほど壮麗な神殿があっても、それがわたしたちの信仰を支えるわけではない。

ステファノは主イエスのこの思いを受けとめていた。

ステファノは律法においても、神殿においても、神のみ言葉に聞く、という一点が崩れるなら、あなた方はモーセに逆らって偶像の神を造ってくださいと言った先祖たちと同じ系譜に連なるのだ、と語るのです。

どんなに律法を後生大事に生活の中で唱えても、神殿に行く生活を欠かさずまじめにおつとめをしようとも、語られる神の言葉に聞くということをやめれば、偶像礼拝になるのだ、とステファノは言っているのです。

律法も、神殿も偶像になるのです。

それは今を生きるわたしたちも全く同じ。どんなに聖書を大事に扱っているように見えても、教会に毎週通い、教会で様々な奉仕をし、教会のために働いているのだ、という自負があっても、語られている神の言葉に聞いて、その言葉によって具体的に生きようとし、神に応答することがないのなら、聖書も教会も偶像と化してしまうのです。イスラエルは、信仰の歴史を刻む民であったけれども、同時に、不信仰の歴史を、神にたいする反逆の歴史を刻む民であったのです。

ステファノは、そのことを率直に語る。「かたくなで心と耳に割礼を受けていない人たち、あなた方は、いつも聖霊に逆らっています。あなた方の先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」

今、神の言葉をあなた方に伝え、神の言葉そのものであるイエス・キリストに聞こうとしないあなたたちの態度は、律法と神殿を偶像化している。

ステファノ言葉を聞いていた人々は、激怒しました。

そしてステファノが「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見

える。」という言葉聞いたその時、彼らはステファノに一斉に襲いかかり、彼を連行し、都の外で、石打にし、リンチを加えました。神が見える、救い主が見えるという発言は、イスラエル人々からすれば、神への冒瀆以外の何物でもなかったからです。

裁判を中断させて、リンチを加える。こんなことがまかり通ったのか、というような出来事です。しかしこの事実は、彼らのステファノへの怒りがどれほどのものだったか悲しいまでに物語っています。たしかに、自分たちを神への反逆者とし、偶像礼拝をする者としているのですから、ことに激怒したのです。

しかしこの怒りは、人間の暗闇の中にある姿を現しているのです。今ここで、神のことをはなから信じていない人たちの話をしているのではない。律法も大事にし、神殿生活も大事にして、生活の中心に据えている人たちの話なのです。しかし彼らが神の言葉に聞く、ということをやめれば、直ちに神への反逆者となり、偶像礼拝の信仰者になる、その事実を見たくない、認めたくない、そんな自分はいない、そう思い込みたい。人間にはそういう暗闇の中の自分がいます。ステファノはその姿をあらわにした。暗闇の自分を暴かれる、それがこの怒りの底にはあるのです。

ステファノは石打で息を引き取る直前に、主に呼びかけて、「主イエス、わたしの霊をお受けください」といい、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」と叫んでいきました。ステファノの地上での最後の言葉は、キリストに自分を委ねるということでした。それは神の言葉に聞いて歩みだしたステファノでしたから、どういう地上での最後を迎えるにせよ、神のみ腕の中に受けとめてください、という祈りでした。そしてもう一つ、彼らの自分ではどうしようもできない罪を主よどうぞあなたが負ってあなたが赦してください、というものでした。それはイエス・キリストの十字架に続く、ステファノの歩みそのものでした。

ステファノの説教を繰り返し読み、聞き、自分への語りかけとして、聞いていきたいと思います。